

原田市太郎先生の思い出

浜島 繁隆

原田市太郎先生との出会いは、1958年の夏、今は移転してないが、知多半島の新舞子にあった東大の臨海実験所でした。その頃、先生は名古屋大学におられ、細胞学の実験材料となるホソエガサ (*Acetabularia calyculus*) を近くで採集できる所を捜しておられました。私が1956年伊勢湾の常滑市沖で、この熱帯性の海藻ホソエガサの自生地を発見し、それを研究誌に報告していたので、その自生地に案内するよう依頼されたのです。書類・資料を入れた風呂敷包みをわきにかかえた温厚なお姿が今も脳裏に浮かんできます。その日は海に舟を出しましたが、潮の関係で採集できず、後日、地元の人が採集したホソエガサを届けることで、責任を果たすこと

ができました。

それから20年ほどはお会いすることもなかったのですが、水草同好会を作るということで再び先生に指導をうけることができるようになりました。研究の別刷などをお届けすると、“講義に少し使わせてもらったよ” といったご返事などいただき勇気づけられました。また、水草の中で *Najas* が不明のところが多いので研究を進めるようにともアドバイスをいただきました。このようなアドバイスを受けながらも、成果の報告をすることなく、先生が帰らぬ人となり大変残念に思っております。先生のご冥福をお祈りいたします。

一博物エピキュリアンのつぶやき (最終講義資料)

1980(昭55)年2月29日 原田市太郎

1 原市というところ

2. ふしぎに“いのち”永らえて

仮死状態で出産したとか。幼時から大病の連続。まわりも自分も「……とても、おとなまで保つまい……」と危惧。

東大・理・植物は当時、入学定員8名。入学した同期生8人のうち、途中で他学部へ2人移ったので、昭和16年に卒業したのは6名。その年の暮れに“大東亜戦争、ぼっ発。“終戦”になってみたら、次の如し。

2名：“支那大陸”で戦死

1名：工場動員で病没

2名：戦役に服し、生還

1名(原田)：なにごともし

いく度か召集をうけて営門をくぐりましたが、虚弱のためいつも即日帰郷。結局3人だけになりました。“日露戦役”の軍歌「戦友(ここは御国を何百里)」の一節“……不思議に命永らえて……”を、しみじみと感じております。

因みに、同期の動物学科もやはり8名入学しましたが、戦死・病没などで、やはり3人しか生き残っていませんでした。しかるに先年、北大理学部で同僚として十数年をともにした玉重君が急逝され、うたた感無量。

3. 博物学で身すぎ世すぎのこと

(i) 生物のことは何も知ってなかった。

東京本郷の“街っ子”育ちなので、山野の自然は知りませんでした。高校理乙へ進んだのは「……医者になれば食いはぐれない……」ぐらいに、まわりから奨められた程の理由。

高校では生物クラブにちょっと顔を出しましたが、とくに生物学に強い関心があったわけではない。高校は諸般の事情で5年もやりましたが、小説のラン読と酒のガブ飲みに見つを抜き、青春の浪費をしただけ。

(ii) 植物学科へ入った動機。

大学へ行くとなって“実学的”な方面に気が向かず、文学部か理学部へと思いました。理・植物を受けたのは、今にして想えば、次のような諸要因の複合結果で

あったようです：1. 自然弁証法，生哲学，進化論になんとなく“かぶれ”，2. 先生・先輩のおすすめ，3. 動物実習が苦手で成績不良，4. 受験が易しい，5. 高校理科から文学部を受けるのはちょっと難しい，などなど。

(iii) 大学へ入って

植物学科の学生とはなりましたが，植物のことは全く知らない。野外実習でダイコンという植物を初めて識って笑われました。

一年生と二年生のときは，まず並みの学生生活を送ったつもり。余りにも植物の名を知らないのて，多少発奮し，大菩薩峠へせせと出かけ植生調査のまねごとをしました。先生方から「あいつは分類学をやるらしい」と誤解されたようです。

次第に遺伝学・細胞学にひかれ，内外の教科書を数冊読みましたが，実際のところ殆んど解りませんでした。

ある先輩にアジられてペゴニアの遺伝実験をこっそりとやったこともあります（のちにペゴニアの性表現の研究に手をつけた伏線となっております）。

また，ショウジョウバエの遺伝実験をひそかにやってみました。高校の旧師故今井先生と森脇先生（都立大名誉教授・国立遺伝学研究所前所長）の影響といます。森脇先生から「このハエの交叉率は地域によってちがうようだ。日本ではどうか，調べてみたまえ」と言われました。各地へ採集に出かけたり，自宅で細々と交配実験をやりました。ところが，植物教室の先輩から「ここは植物なんだ；ハエなんかいじってどうするんだ；今は止めた方が身のためだ」と忠告をうけ，あっさりとアキラメました。ショウジョウバエには今でも未練があります。戦後は，あちこちの植物“専攻”の研究室から，このハエの一流研究者が出ております。

(iv) 水草（みずくさ）との対面

三年生になると卒論の分野を決めるわけ。私は遺伝学講座（篠遠喜人先生担当）を志望しました。「ヘロビエ（単子葉水草の1グループ）の核型（染色体の外部形態）」という課題をいただきました。当時，先生の講座は「単子葉植物の核型研究」が主なテーマでした。それは昭和15年（1940）春のことです。

ところが，ヘロビエという水草は見たことも聞いたこともない。その頃，東大には分類学の大家が多勢お

られましたが「京大の三木先生が水草の専門家だから，そこへ教わりに行きなさい」と篠遠先生のご指示をうけ，京都へ出かけました。きゅうを負うという言葉通り，顕微鏡とフトンを背負って上洛。百辺遍のアパートにその年は3ヶ月，卒業した翌年（昭16）は半年余も暮らしました。三木先生の懇篤なご教示に従って，日本各地（朝鮮へも）へ水草の採集にかけまわりました。

病弱と貧困という状態でしたが，若さに任せて採集・調査を強行。北海道も何回か訪れました。駅で仮眠したり，発熱して厚岸実験所の故奥田所長官舎に収容されたり，北大・理・植の研究室にかくれて泊りこんだり，また松浦・芳賀・須藤先生などのお宅で寝食のお世話にあずかりました。そのほか，多くの方々に借金したり，多大なご迷惑をおかけ申しました。野放図な若者だったわけです。

このような採集を中心とした研究の“やり方”について手酷しい批判も受けました：「君のやっていることは，単なる人足仕事だネ」。研究の意義・目的・価値の認識，方法論，手段・手法，などという“科学論”の問題でありましょう。私なりのヒ見も持っています。

(v) 師 恩

篠遠喜人先生（東大名誉教授，国際キリスト教大学前学長，財法日本科学協会理事長）から享けました学恩・人生教訓のことは，今更ここで一々申し述べるまでもなく，ただ頭の下るのみです。

故三木茂先生（京大助教授，大阪市大名誉教授，昭和49年で逝去）は，生態学・古生物学などの分野で活躍なされ“メタセコイアの三木”として世界的に令名高い学者であられました。水草については勿論第一人者でした。私の水草の仕事は，三木先生なかりせば手の下しようもなかった次第。故先生のご教示には，いくら感謝しても尽きません。単に水草の知識だけでなく，仕事に“喰いつく”気迫と“からだを張った”馬力に深い感銘をうけました。しかし，私にはまねの出来ることではありませんでした。

名大での15年近い間，島村環先生（名大名誉教授）からは，おりにふれて垂訓がありました：研究者は業績によって評価される，理屈よりも事実である，シュレーを作るな，など。私はこのお諭しに反すること許り。

北大へ来まして16年。東大の大先輩であられる松浦

一名誉教授には日夜接しておりました。その研究情熱、科学活動論と実践など大変啓発されました。とても、ついて行けぬ“不肖”の後輩でした。

木原均先生、故岡田要先生、牧野佐二郎先生、団勝磨先生、小倉謙先生、ビュンニク先生などなど多くのせき学の方々から直接・間接に私は大きな影響を受けております。

ほかの沢山の諸先生、先輩、学友への感謝の辞は、ここでは省かせていただきます。

(vi) 水草との悪縁

とにかく昭和15年以来、途中であれこれと色々な分野に首をつっこみましたが、結局のところ水草にみせられて40年ほどを過してきました。

水草の染色体学・花粉学・発生生物学というわけですが、鋭い“解析的な現代生物科学”に資するには、まだまだ格段の努力をせねばなりません。

水草と長い間つき合っていると、自から愛着が生じます。また、水辺には独特なふん囲気があります。次第に、生物科学というよりは水草の“博物学”へと傾斜してきました。

(vii) 要するに

虚弱と貧乏で些かの苦労はしましたが、東大・名大・北大という恵まれた場所で、すぐれた先生・先輩・同輩・弟子・学生に囲まれ“温室育ち”のようなものでした。ちがった環境・職場で“もまれ”た体験なし。戦争の荒波もモロにはうけなかった。

私の“甘さ”は、結局のところ、自己鍛練・自覚・責任感の不足の故です。恵まれた環境をフルに活用して“きびしく”生活すべきでした。アポロガイズいたしません。

「やれる事しかやれない」という低俗な態度で、大過・小過の40年を経ました。申し述べるような哲学・思想・世界観・社会意識（イデオロギー）・人世観もなく、お恥ずかしいことです。

(中 略)

III 見果てぬ夢

- 1) 調査・研究の未発表結果(経過でも)を記録として残すこと。かつて故田中義磨先生はこう申うされた

「おカイコはせせせと食べて、やがて立派な糸をはき出す;仕事もこのように」。私は、そう大して取り込みもしませんし、また消化能力も弱いので、とても立派な糸など出せませんが、それでも私なりにやらねばなりません。

2) 水 草

昨年、大滝氏(東京小石川高校)をはじめ多くの方々と「水草同好会」なるものを作りました。この会を着実に発展させたい。また、世界的規模で水草関係者と連れいする必要もあり、昨夏アメリカへ出かけ一・二の団体と連絡はつきました。これから毎年世界のあちこちへ行くのを楽しみにしています。

水草の核型、細胞学・生態学、分類学などは片っぱしからやらねばなりません。私ひとりでやれる事でないのは当然。私は自分のやれる事にポチポチと手をつけるだけ。

3) 性

自身としては、スガモの性染色体と性分化のことを徹底的に解明しなければならない。

沢山の雌雄異株植物で性染色体の存否の確認をする必要もある;私ひとりで、とてもやれる仕事ではありません。

性分化の生物学的研究を基礎として、きわめて広い“性科学”研究機関ができることを夢めています。ドイツには且つて在りました。日本では、故山本宣治・故朝山新一などの方々が考えておられました。

4) 形

“形態論”とでも言うべき考察を、私なりに方法論的・理論的にまとめてみたい。少なくとも、ここ十数年行ってきた「植物形態発生学」の講義資料の整理と、ゲーベルの著書「植物実験形態」1908の訳出は早いところ片づけたい。

以上いずれも、老いらくの夢。果してどうなることやら。

以 上

春三月一期一会の別れ哉 原 市 醉 士